Hello New World, Many Heroines

秋空星夏

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日突然部屋の扉が異世界と繋がって……。ヒロインを育てたり、ちょっとチートなアイテムを使って無双したり、なんやかんやと世界を救うお話です。

ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ３４１７ｃｋ／　こちらもどうぞ

目次

Hello ―― 1
Hello2 ―― 5
Hello3 ―― 9
Good bye ―― 13
Good bye2 ―― 17
Good bye3 ―― 24
Guild ―― 29

Ｈｅｌｌｏ

口をついて出たのは疑問ばかり。なぜ、どうして、なんだここは。里中公平は先程から口をポカンと開けたまま事態を把握しかねていた。それもそのはず、部屋の扉を開けると、ポツポツと背の高い木々が生えていたのだから。これは、例えるならば森の中だろうか。

どう考えてもおかしい。公平の部屋は玄関扉を開けて、通路を右に曲がったところにある。つまり、部屋の扉を開けてまず最初に目に映るのは白い壁なはずなのだ。

「なんだってんだ……」

とりあえず公平は落ち着くために部屋の扉を閉め、慣れ親しんだ自室へと戻り、ベッドに腰掛けた。そして、記憶の糸を一から辿る事にした。

確か、昨日は日曜日。両親が仕事でいないので、いつものように一人寂しくコンビニで一日分の食料を調達してゲームををやりながら食べていたはずだ。そうして日がな一日ダラダラと過ごした後、これまたいつものようにベッドの中で異世界の妄想をしながら眠りについた。

「まさか……俺の妄想がリアルに!?」

そうは言ったが、すぐにそれはないかと自分を納得させ、公平は状況の把握に勤しむ事にした。

とりあえず、先程見た光景が夢だったという可能性を考慮して、公平は再び部屋の扉を開ける事にした。

「はあい。ずいぶんと楽しそうね」

公平はすぐにガチャンバタン！　と、大きな音がなる程乱暴に扉を閉めた。

扉の先に女がいた。しかも、背中に天使の羽が見えた気がする。

「いや、それは流石にないだろう、俺」

先程のは見間違いだ。そう思い、公平は再び扉を開けた。

「ちょっと、次はないわよ」

バタン！

「おかしいおかしいおかしい」
　夢であってくれ、公平はそう思わずにはいられなかった。確かに学校に行って家に帰り、コンビニ弁当で腹を満たし、ゲームをして眠るという繰り返される日常は退屈に思っていたし、苦痛でもあった。しかし、だからといってこんなにも急に前触れ無く日常が壊れると混乱する。
　不意に、アニメやエロゲの主人公ってこういう状況でも全く焦らないで「ふむ、またか」とか言っているよな、などという考えが公平の頭をよぎった。
「私、次はないって言ったわよね？」
　うんうんと部屋のど真ん中で頭を抱えて唸っている公平に、自身の部屋だと言わんばかりに堂々と部屋に侵入して来た女はそう言った。
「知らんがな。ていうかあんた誰だよ。俺の部屋はどうなっちまったんだよ」
「チッ。これだからバカは……」
「てめえ、初対面の人間にバカってなんだ。お前の方がバカだ。大体なんだよその羽。コスプレかよ！」
「言うに事欠いてこの私にバカですって？　バカって言う方がバカなのよバーカ！　しかもコスプレじゃないしー。私本物の天使だしー」
「自分で天使とか言ってる奴を誰が信じると？　バカは黙ってお帰りください」
「あんた最低ね。せっかくあんたの身に何が起きてるか説明してあげようと思ってたのに、説明する気失せちゃった♪」
「お前マジでなんなんだ……」
　なんなんだ、こいつは。公平は先程とは別の意味で頭を抱えざるをえなかった。部屋に我が物顔で不法侵入してきたかと思えば、今度はバカ呼ばわりだ。これ程までの理不尽が存在するだろうか。
　公平の頭を悩ませている当の本人は、頭を抱えて何も言わなくなった公平を、宙にふわふわと浮かび、笑顔で見下ろしていた。
「あん!?　浮いてる!?」
　頭上から聞こえた声に反応し、視線を上げた公平は驚愕した。そし

て、驚愕ついでに、その姿を凝視した。
あどけなさの残る顔にある、生意気げに少し釣り上がった瞳が印象的だった。美人というよりも、可愛らしいといった表現の方がしくりとくる。
服装はいかにも天使然とした、少しダボつきのある白いドレスを身にまとっていた。ダボつきがある服装からでも、その豊満なわがままボディが見て取れた。胸も尻も平均よりも大きい。思春期の男の子的には非常に悩ましいスタイルをしていた。しかし、そのスタイルからは想像出来ない程に肩や手首は少女的だった。強く握れば折れてしまう。そんな言葉が似合いそうだった。
「言ったでしょ、私は天使よ。これくらい出来て当たり前。でね、もうあんたとじゃれるのにも飽きたからあんたの身に何が起きてるのか説明するわね」
思わず見惚れてしまっていた公平をよそに、自身を天使と名乗る女は説明を始めた。
「簡単に言うと、私の住む天界の方で色々とゴタゴタがあって、この世界を救う人を求めてたの。何人か候補がいたんだけど、その中からあんたは選ばれた。光栄に思いなさい。あんたは英雄になる権利を得たの」
「ちょっと何言ってるかわかんない」
「つまり、簡単に言うとヒロインを育てて世界を救えって事」
「ちょっと更に何言ってるかわかんない」
「大丈夫。私も色々とアシストしてあげるから、心配しないで。ヒロインの斡旋もやってあげるわ。ちょっとしたチートアイテムもあげるし」
「いやだからね？　会話が噛み合っていないと思うんだ、俺は」
「あ、まだ自己紹介してなかったわね。私の名前はホーリー。これから長い付き合いになるんだから、呼び間違えたりしたら許さないわよ。さ、ある程度説明も終わったし、チュートリアル行きましょう。小国を救いに行くわよ。さっさと服着替えなさい。私も手伝ってあげるから」

「いや、だから会話が……」
公平の願い虚しく最後まで二人の会話は成立しなかった。それどころか、公平は服を着替える事を強要され、ろくな準備もしないままホーリーに連れられて部屋を出た。

Ｈｅｌｌｏ２

何故か外に置かれていたママチャリに乗った公平は、ホーリーの言うままに舗装のされていないデコボコ道を走っていた。後ろにはホーリーが横向きに腰掛けていた。

「空飛べるんだからわざわざ荷台に乗ることもないだろうに」

「いーの。それに、こうしていると青春って感じがしない？　微妙な距離間の幼馴染とかお互いの事を好きに思ってるのに告白に踏み切れない青い男女がじゃれる、そんな感じ」

ホーリーはそう言って公平に軽く抱きついて彼の脇腹をくすぐった。

「おま、ちょ！　やめろって！　危ないだろ」

「うりうり～」

公平は倒れそうになる自転車を気合で持ち直した。そして、今だにくすぐる手を止めないホーリーに、再三やめるよう懇願した。それでも一向にやめる気配がないのを感じ取った公平は、ハンドルをしっかりと握った後、わざと大きめの石の上を通った。

そうして生じた衝撃がもろに荷台に座るホーリーを襲った。ホーリーは金属製の荷台にしたたかに尻をぶつけた。

「痛！　なんて事すんのよ。可愛いホーリーちゃんのプリチーなお尻にあざが出来ちゃったらどうすんのよ」

「うっせ。やめろって言ってるのにいつまでもくすぐってるからだろ」

「そんな事言って、ちょっと楽しんでたくせに」

からかうように言うホーリーに、公平は少し納得してしまった。彼女の言う通り、公平は楽しんでいたのだ。それもそのはず、どれだけ願っても訪れなかったシチュエーションを今まさに体験していたのだから。先程までの二人は、傍目から見ればホーリーの言う通り、学生が放課後夕日を背に街を走っている、まさにそんな表現がピタリと当てはまっていた。二人の服装が学生服ではない事と、ホーリーの背中に羽が見える事を除いて、だが。

公平はそんな心情を悟られないように、早々に話題を切り替える事にした。
「そういや、さっき、ヒロインがどーたらとかチートアイテムがどーたらとか言ってたけど、あれなんだ？　それに、世界を救えって言われても俺パンピーだし」
「ああ、あれね。そのまんまよ。この世界はいわゆるファンタジーＲＰＧなの。公平の世界で言うと、中世ヨーロッパが一番近いかしら。宗教を中心に人々は生活してるわ。当然、魔女狩りも行われているし、国の大半は王国よ。それに加えて魔物とよばれるモンスターも生息してるわ。過去に何度かトリフォール遠征軍による魔物と人間の大規模戦争も行われているわ。もっとも、人間側の大敗で戦争は終わって、人間は土地を大幅に失ったけど」
「待て。そんな急に色々言われても混乱する。一つずつゆっくりと説明してくれ。まずそのトリフォール遠征軍ってのはなんだ？」
「この世界で大きな力を持っている宗派の一つよ。彼らはトリフォールという天使を宗主として崇めてるの。貧しい民を救うために国に立ち向かい、施しをしていると言えば聞こえはいいけれど、やってる事は国との癒着。国から横流ししてもらった食料を信徒に分け与える事によって勢力を強める。国は信徒から巻き上げた金を得る。最低よ」
ホーリーは吐き捨てるように言った。
事実、トリフォール会はそうして着々と信徒を増やし続けてきた。そうして、多くの国々と関わりを持つ内に、トリフォール会はその勢力を伸ばし、大半の国が逆らえないようになってしまっていた。しかし、それも先の大戦以前の話だが。
魔物との大規模戦争に敗退したトリフォール会は、それを契機に影響力を大きく失っていた。しかし、そうした事があって未だ、一大宗教の一角を担っていた。
「天使？　ってことはあれだろ。トリフォールって奴はお前の仲間なんじゃないのか？　ずいぶんと嫌ってるみたいだけど」
「当たり前よ。あんなごうつくばりで自分の事しか考えてない強引な

奴。あいつはあまりの悪行の末、アークエンジェルへと身をやつしたわ。まったく、なんでそんな奴が人間に崇められてるんだか。崇める相手なんて他にも沢山いるでしょうに」
「なんか……天使にも色々あるんだな」
「わかってくれて嬉しいわ。なんにせよ、一々説明してたらキリがないからこれをプレゼントするわ。ハウトゥーファンタジー。喜びなさい、チートアイテムよ」
　ホーリーは右の手のひらに光を出したかと思えば、次の瞬間には一冊の分厚い本を持っていた。そして、そのままの流れで本を公平に見えるように顔の横に差し出した。
　後ろから差し出された本をちらりと一瞥した公平は、本に対する疑問を口にした。すると、スラスラとホーリーはハウトゥーファンタジーに対する説明を始めた。
　この世界の知識、技術、常識などが書いてある事。この世界の地図代わりにもなる事。そして、何よりも公平が驚いたのは、この本はある程度未来の事が書いてあるという事だった。
「すごいじゃん。未来がわかるとやりたい放題じゃん」
「そう考えるのは早計よ。あくまでもある程度だから、あんたがとる行動や不確定な要素が絡んでくると、途端に別の事が起こる。参考程度に考えるのが一番ね。後、あんたの成長に伴ってこの本は様々な恩恵をあんたに与えてくれる。ただし、使い方を誤れば火傷する程度じゃ済まないから、気をつけなさい」
　なんていう会話をしていると、ホーリーが止まるよう言った。二人の少し先に見える粗末な城壁に囲まれた国が、目指す目的地のようだ。
「自転車はそこの藪の中に隠しておきなさい。この世界ではまだ開発されていないものだから、見つかると面倒よ」
　ならなんでチャリを使わせたんだ、という言葉を飲み込んで、公平は言われるままに藪の中にチャリを隠した。
「始まりの国、スフィーダよ。まずは、あそこの国を救ってもらうわ」
　何もかもが急で強引だったが、少しずつ環境の変化に適応してきた

公平は、特段不平不満を言わなかった。むしろ、少しのワクワクを伴ってホーリーと共にスフィーダに向かって歩き始めた。

Ｈｅｌｌｏ３

デコボコの道を歩く事十数分。スフィーダの入り口に到着した。ずいぶんと痩せて見える門兵に、見慣れない服装を怪しまれたが、他国の者である事を告げると、意外にもあっさりと入国する事が出来た。

「お前、ホントに天使なのな」

公平がそう言うのには訳があった。先程門兵は、公平の横に浮いているホーリーの存在に全く気づいていなかったのだ。

「何よ、まだ信じてなかったの？」

公平はその問いに曖昧に答えた。彼の興味は今、スフィーダにあったのだ。

地面は一見すると舗装されているように見えるが、その実踏み固められた土で出来ているだけだった。点在する露店に置かれている食料品以外の商品は、どれも長い事買われていないのか土埃で汚れていた。道行く人々の栄養状態も悪そうだった。

要約すると、この国は疲弊しきっていた。緩やかに死へと向かっていく国。そう公平は解釈した。

「なんだここ。こんなとこ救えってか」

ホーリーの姿が見えない以上、公平は独り言を呟いている形になる。それを理解している公平は、周囲には決して聞こえない程の小声でホーリーに話しかけた。

「そうよ。チュートリアルだと思いなさい。ここを救うのは難しくないわ」

「救うたって、何をすれと」

「なんでも私に頼ろうとしないで、少しは自分で考えたら？」

そう言って、ホーリーはハウトゥーファンタジーを右手から出現させ、公平に手渡した。

ホーリーの冷たい態度にどこか不満を抱きながらも、公平はハウトゥーファンタジーを読むことにした。

内容を要約すると、スフィーダ王国は戦争に負け、土地を失った。

それに加えて、十分な備蓄をしないまま開戦してしまったがために、国の流通が滞ってしまっていたのだ。
　欲しがりません勝つまでは。そんな言葉を公平は思い出した。スフィーダの状況は敗戦国のお手本のような状況だった。
「ふーん。そういう事ね。便利だな、ハウトゥーファンタジー」
「私特製だもの、当たり前よ。さて、状況を把握したところで、あなたはここからこの国をどう立ち直らせるのかしら？　選ばれた人間の力、見せてちょうだい」
「っつってもなあ……。選択肢は２つだな」
　周りを気にせず話すために、公平は人気の少ない裏路地のような場所へ移動した。そして、自身の考えを語り始めた。
「１つ。民意を煽って再び戦争という運びにもっていって、近隣の村やなんかを襲って食料と奴隷を確保する。２つ。敗戦国は敗戦国らしく経済復興に力をいれる。このどちらかだな。ただし、双方にメリット・デメリットが存在する上に、何より俺にある程度の地位がないとどちらも実行に移せないという大きな問題がある」
「ふーん」
「なんだよ、気のない返事だな。せっかく人が考えたというのに」
「あんた意外と適応力高いのね。急に連れて来られたんだから、もうちょっと狼狽してもよさそうなもんだけど。ま、適応力が高いのは良いことよ。サバイバル環境に置かれた時、適応力のない人間は真っ先に死ぬしね」
「今この状況がサバイバルかと言われると疑問が残るが、まあそんな事はどうでもいい。お前、俺にこの国を救えと言ったな、はっきり言って無理だ。この国は終わってる。早急に手を打たないと滅びるのは明白だ。どうしてもと言うなら俺に権力を寄越せ」
　全て公平の言う通りだった。スフィーダはひと目見てすぐに国としての機能が停滞しているとわかる程だ、いつ滅んでもおかしくない。そんな国を立て直すには相当の労力が必要だし、力を持った協力者も必要だ。現状、そのどちらも欠けているのだから、公平がそう言うのも無理なかった。

「ふふふ。そんなあなたに天界ガチャガチャ～」
　ホーリーはハウトゥーファンタジーを出現させた時と同じように、右の手のひらから光を発した。光が消えると、デパートなどでよく見かけるガチャガチャが出現した。色の濃いカプセルだったので、中に何が入っているかはうかがい知れなかった。
「なんでド〇えもん風……。しかも〇山のぶ代さんバージョンじゃん、年バレるぞ」
「うっさい。文句ばっかりのあんたにホーリーちゃんからプレゼントよ。回してみなさい。公平の欲しいものが出るように設定したから。ホントはお金を取るんだけど、チュートリアルだからタダにしてあげるわ。だから、むせび泣きなさい。そして、ホーリー様ありがとうございますって感謝しながら回すのよ」
「お断りだ。お前みたいな女に感謝なんてしたくない」
　口ではそう言いつつも、公平は天界ガチャガチャを回した。そして、出てきた紫色のカプセルを開くと、中には権力と書かれた一枚の紙が入っていた。
「あら、ラッキーねー。あんたの望んでた権力じゃない。これでこの国救えるわね。よかったじゃない」
「……茶番もいいところだ。お前さっき自分で公平の望むものが出るようにしておいたから～なんて言ってたじゃねえか。しかもなんだよこれ。紙に権力って書いてるだけじゃん」
「はあ……。いい加減私が天使だって事を理解しなさい。天使の出したガチャガチャから出てきたものが、普通な訳ないでしょ」
「さいですか……」
　どうにでもなれといった様子の公平を尻目に、ホーリーは説明を始めた。この紙を持っている間はこの国限定で貴族以上の権利を所持しているとみなされる、と。
「あくまでも権利よ。認知度がある訳でも実績がある訳でもないわ。つまりあれよ。か、勘違いしないでよね！　あんたの事なんか好きでもなんでもないんだからね！　状態よ」
「いやちょっと何言ってるかわかんないです」

「なんにせよ、これであなたは王に謁見する資格も得たし、一定階層以下の人間を動かす権利も得たわ。チュートリアルはここまで。後は一人で頑張りなさい。じゃあね」

ホーリーはそれだけ言って空へと消えた。残された公平は権力と書かれた一枚の紙を握りしめて呆然としていたが、やがてその足を王宮へと向けた。

差し当たってやることがなくなってしまったので、とりあえず王宮へ行ってこの紙の効果を試すと同時に、自分なりの国を救国開始しようとしたのだ。

Ｇｏｏｄ　ｂｙｅ

公平はまず、王へ謁見するにあたって最低限の情報を仕入れようと、王宮への道すがらハウトゥーファンタジーを読んでいた。調べるべきはスフィーダ王国を取り巻く環境。兵力、国力、そして何よりも周辺諸国の関係。言い換えると、横の繋がりである。

公平は経済復興による救国を選択した。戦争が終結し、賠償金などの支払いも終わっているのであれば、もう這い上がるしかない。と、なれば外貨を稼ぐ事が最優先事項となる。食料などが安定して生産出来るようになるまでの間、外貨を使い輸入するのだ。

そのためには、この国で使われている通貨は国際通貨ではないようなので、まずは種銭を集める必要がある。つまりは、スフィーダで発行している通貨を一度、周辺諸国に全てばら撒き、食料などを買い漁る。

それによって、国内でのスフィーダの通貨の信用価値を落とし、物々交換を主流とさせ、国内での流通を復活させる。

国力が回復した頃を見計らって他国にそれぞれの需要に適したものを生産する。それらを国際通貨で取り引きし、当面の外貨稼ぎとする。公平は、そこまでを頭の中で導き出していた。問題は、これらの策をどう納得させるか。全てはそこにかかっている。

「どうしたもんかね」

いっその事街に火を放つか？　全てを失った者は何にでも頼る。例えそれが悪魔であろうと頼る。人間、追い詰められればなんでもするものだ。などいう危険思想に傾きつつあった公平は、気がつけば王宮入り口に到着していた。

街の状況が状況だけに、やけに綺麗な王宮はどうしてかしみったれたものに見えた。公平はそうした思いを顔には出さずに、入り口を守る二人の兵士に要件を伝えた。すると、公平はあっさりと王宮へと入る事が出来た。

どうやら、権力と書かれた紙の効果は本物だったようだ。公平は少し、ホーリーに対する好感度が上がりかけたが、冷静に考えると今の

状況は全て彼女によって作られたものである事を思い出し、結局好感度が上がる事はなかった。
「やあやあそこの君。悪いんだけど道案内頼める？」
王宮に入る事には成功したが、どこが何の部屋なのかわからなかった公平は、近くを歩いていた兵士に話しかけた。
「は。自分が、でありますか？」
「うん。何か問題でも？」
「いえ。喜んで案内させていただきます」
兵士のあまりに謙遜した態度にどこか違和感を覚えながらも、公平は、陽の光が眩しいほどに入る石畳の廊下を歩いた。そうして５分程歩いた頃だろうか、公平が王宮の広さに感心し始めた頃、兵士はその歩みを止めた。
「こちらです」
「ん。ありがとう。もう言っていいよ」
うやうやしく頭を下げた兵士には目もくれずに、公平はさっさとその大きな扉を開けて謁見の間へと入っていった。
貴族特権なのだろう、謁見の間に入ってすぐに、執事のような格好をした男に個室―といっても一般的な４ＬＤＫマンションのリビングの二倍程はあるが―へと公平は案内された。
急に訪れたので、それなりの時間待つ事を覚悟していた公平だったが、意外にも出された紅茶を飲み終わる前に王が来た。ちょうど昼時だったため、昼食をとるついでに、という事なのだろう。王は来て早々に従者に食事をここに運ぶよう命令した。どうやら公平にも食事を与えるつもりのようだった。公平は大して空腹ではなかったが、特段断る理由もなかったので相伴に預かる事にした。
「それで、サトウナカ卿。急にどうしたのだ。何か私に話があると聞いているが」
公平は食べていた野菜スープを吹き出しそうになったが、なんとかこらえた。
この世界で日本風の名前というの極めて珍しいものなので、ホーリーが公平という存在を貴族としてねじ込んだ際に、つじつま合わせ

として強引にこの世界風の名前にしていたのだ。当然、公平はそんな事は一切知らないので、こうなるのも無理はない。
「失礼。ちょっとスープが気管に入ってしまいました。それで、話なんですが、現状この国は敗戦処理に国内流通の回復にと山程の問題が積み重なっていますよね？　実は私、それらをひとまとめに解決する方法を考えたんです」
「なんだと!?　早く申してみろ!」
　王は手にしていた銀で出来たスプーンを乱暴にテーブルに起き、前のめりになって言った。彼にしてみれば、公平の発言は渡りに船だった。
「おおっとお。色々と複雑で長くなるので落ち着いて聞いてください」
　公平はそう言って王をなだめた後、ここに来るまでに考えていた策をゆっくりと話した。しかし、話が進むに連れて、王の表情は険しいものへと変わっていった。
「どうです？　いい話だと思うんですが」
「そなたは一度この国を壊せと言っているのだろう？」
「まあ、見方によってはそうともいえますね。でも、この方法なら問題なくスフィーダは国力を回復させる事が出来ますよ」
「ならん。先祖代々受け継いできた我がスフィーダを一時的とはいえ壊すなどという事は私には出来ん。せっかくだが、この話はなしだ」
「そうですか」
　この案がダメとなるともう一つの選択肢戦争しかなくなる訳だが、この様子では民意を煽るのにも時間はかかりそうだな上、勝てる保証もどこにもない。
（となれば身売りだな）
　早々に自分の身を他国に売りに出す事に決めた公平は、いかにしてこの国から金目の物を強奪するかの算段をたてていた。
　ホーリーはこの国を救えと言っていたが、同時にチュートリアルでもあると言っていた。ならば、チュートリアルを飛ばしてしまっても問題はないはずだ。そう公平は考えた。それに、最終目標はこの世界

を救う事なのだ。これは大事の前の小事、そう公平は自分を納得させた。

そうと決まればダラダラと食事をしている場合ではない。公平は王への挨拶もそこそこに王宮を出た。目的は金目のもの。今や公平は、立派な売国奴だった。もっとも、彼がこの国に滞在した時間は４時間にも満たないが。

その時、公平は気づかなかったがハウトゥーファンタジーはひっそりと更新されていた。

『里中公平　ジョブ売国奴　スキル　天使の加護』

Ｇｏｏｄ　ｂｙｅ２

王宮を出た公平はまず、兵舎へと向かった。武器の調達を行おうとしたのだ。ホーリーから事前にこの世界が中世ヨーロッパ然としている事、加えてハウトゥーファンタジーでこの世界の治安についての知識を得た今、丸腰でふらつくのは危険であると認識したのだ。

そこで、公平はとりあえず、切る事よりも断ち切る事に重点を置いて開発された騎士用のショートソードと呼ばれる剣と、単発式のクロスボウを拝借した。鎧はかさばるを事を考慮して持ち去らなかった。代わりに、クロスボウ用の短矢を多めに持った。

次に、公平は再び王宮へと戻った。そして、路銀代わりにと金の食器などを少し借りると言って持ち去った。

流石に、スリッパに無地のシャツ、短パンではどうにも落ち着かなかった公平は、先程拝借した銀のフォークを代金として、この世界で一般的な服装を購入した。粗雑な作りのそれは、チクチクとしていて着心地のよいものではなかったが、不用意に目立つよりはマシと自分を納得させた。

そうして、身売りをするための準備を終えようとしていた頃だろうか。公平は背後に人の気配を感じ取った。

振り向くと、そこには明らかにサイズの合っていないダボダボで袖の余っている白いチュニックを、黒い帯で無理やりずり下がらないようにして着ている金髪の少女がいた。

年の頃は十四、五といったところだろうか。身長の低さと、くりくりとした丸い瞳が目を引くあどけない童顔のせいで年齢を予想しづらかった。更に、その身に似合わぬ程に発達している胸が余計に年齢を予想させづらくしていた。

「やあやあ初めましてかな？　私はラナ・アークライト。よろしくねえ」

突然声をかけられた事に驚いている公平を他所に、ラナはダボダボの袖ごとその小さな手を差し出した。握手をしようと言う事なのだろう。反射的に公平はその手を握った。ラナの手は、幼子特有の体温

の高さがあった。
「えーと、あんた誰？」
「ラナ・アークライトさんです～。ところで君、何をしてるんだい？
さっきから周りを気にしながら荷物を詰めていたようだけど。何か面白い事でもしていたのかな？」
「何も面白い事なんてない。ただ荷物を詰めてただけだ。あんたこそ、何やってるんだよ。ずいぶんな荷物じゃないか。旅行かなんかか？」
　ラナは身の丈の半分以上はあるリュックを背負っていた。入りきらなかったハンマーやまくら、服などがはみ出していた。
「そんなところかなあ。この国は戦争に負けちゃったからねえ、どうにもきな臭い動きがあるのさ。錬金術士の私としては魔女狩りになんてあいたくないしねえ」
　言っている事はわりかし真面目なものなのに、ラナの間延びした独特の喋り方で日常会話のような体になっていた。そんな空気に流されてか、公平はポロッと重要な事を喋ってしまった。
「ああ、この国はもうだめだ。緩やかに死へと向かってる。王様はいつまでもお家にこだわって解決策を講じない。こんな国はさっさと見捨てるのが一番だ」
「私は聞いてしまったぞお。君は今王様の悪口を言った。不敬罪だあ。処刑されちゃうぞお。ギロチンで首ちょんぱだあ」
「そんな事になる前にとっととトンズラするさ。お前もそうした方がいいぞ」
「つまり君は移国するという事かな？　なら、私と同じだ。どうだい、一緒に来ないかい？　おっきな馬車を用意してるんだ。君一人増えても問題ないくらいのね」
　国を移動する、というと語弊があるが、ここで自身をわざわざ売国奴だと言う必要もなかったので、公平は訂正しなかった。
　そもそも売国奴とは母国を外国に売り払って利益を得る事を指しているので、公平が行っている事とは厳密には違ったが、そうした微妙な違いを突き詰めても詮無い事だ。

「その提案、喜んで受けさせてもらう。ただ、一つ約束してくれ。不要なまでに俺の事を詮索するのはやめてくれ。色々と訳ありなんだ」
「そう言われると知りたくなるなあ。まあ、ゆっくりと聞き出す事にするよ。それじゃあ行こうかあ。馬車はそこに止めてあるんだあ。ほらほら立って」
「わかったから引っ張るなって」
　やけに乗り気なラナに引っ張られながら、公平はラナの馬車へと乗り込んだ。広いと言い張るだけあって、天幕の張られた荷台はワンボックスカー程の広さがあった。
　公平はラナに倣い、荷台に荷物を置き、馬を操るラナの隣に座り、こう話しかけた。
「で、アークライトはどこの国に行こうってんだい？」
「ラナで構わないよ。私は目的なんてものは考えていないんだあ。道行くままに流れ着いたところが目的地さ。案外、そういうところの方が過ごしやすい場合もあるしねえ」
「ずいぶんとまあ享楽的な事で。まあでも、俺もわりとそういうのは好きだったりする」
「だろう？　決められた人生程つまらないものはない。私はつまらないのは嫌なんだ。だから、私は君に声をかけた。君、普通の人間じゃないだろう？　潜在魔力があまりにも高すぎる」
　ラナは本業には劣るが、それなりに魔法使いとしての才能があった。使えるのは日常生活で役立つ魔法程度だが、潜在魔力を見抜く目だけは本業に負けず劣らずだった。そんなラナの目で見た公平の潜在魔力は、この世界の大魔法使いと呼ばれる者達に並ぶ程だった。
「ほーん。魔力だかなんだか知らんが俺は普通の人間だよ。俺から言わせてもらえば、ラナの方が普通じゃない。そんなちんまい体で錬金術士なんて似合わなさすぎだろう。俺の中での錬金術士は、ひげを生やした胡散臭いおっさんだ。ラナは胡散臭さに欠ける」
「あくまでも普通って言い張るんだね。まあいいや、私の話だったね。便宜上、私は錬金術士と名乗ったけれど、やってる事は鍛冶屋のそれに近い。クロスボウというものがあるだろう？　今はまだ戦場は弓

の方が重宝されているけれど、私はいつか弓がクロスボウに置き換わる時が来ると考えているんだ。でも、そうなるには今のクロスボウでは役不足だ。もっと簡単に扱えて、もっと殺傷能力を上げたものが作れるはずなんだ」

現在使われているクロスボウは単発式のものだった。殺傷力は十分だったが、矢の装填に時間がかかる上に、使いこなすまでにある程度の修練を必要とする。

先程公平が兵舎から拝借したクロスボウも単発式だ。矢を発射した後に弦を引き、矢をセットする。引き金を引いて矢を発射する。それの繰り返しで使用される。これではどれだけの手練でも実用的な連射は出来ない。

「はあ、成る程な。銃を作ろうとしてる訳だ。時代的にマスケット銃か。意外にまともな事やってるんだな。てっきり、金の錬成や死者の蘇生の研究でもしてるのかと思ってた」

「そういう事をしているのは、それこそさっき君が言った胡散臭いおっさんだよ。ところで、その銃っていうのはなんだい？　とても興味深い響きなんだけど」

中世ヨーロッパ程の技術しかないこの世界では銃はまだ開発されていなかった。ある錬金術士が不老不死の薬を作成しようとした過程で黒色火薬が完成し、市場に出回ったが、魔法という存在に打って変わる事が出来なかったために、生産量は限られていた。

ちなみに、魔法は誰にでも使える訳ではない。なので、魔法使いが作った魔法符と呼ばれる符を利用する事で人々は簡易的な魔法を使用している。

魔法符は安価なものから高価なものまで大量に市場に出回っているため、人々は気軽に使用する事が出来た。

「ああそうか。そもそも銃っていう概念がないんだもんな。クロスボウに似たようなもんだ。引き金を引くと弾が発射される。クロスボウとの違いは威力と射程、発射する際に発する大きな音かな。後、わりとどんな人でも使える」

「私が作ろうとしているものじゃないかあ。君はそんなものをどこで

知ったんだい？　ひょっとして、君も錬金術士だったのかな？　いや、それはないなあ。君はひょっとすると『イストブレス』なんじゃないかなあ？」
「イストブレス？」
「歴史の紋章という意味だよ。たまにいるんだあ。個人で時代の技術レベルを押し上げる人がねえ。過去にもそうした人は何人かいた。私の考えでは魔法は自然発生したものじゃない。イストブレスが創りだしたものだ」
　確かに、今の公平はイストブレスといえるかもしれない。およそこの世界では存在しない概念、知識を持っている。加えて公平は、友人がいなかったので日々をゲームと読書で過ごしていたために常人よりも知識が豊富だった。
「だとしても俺がもってるのは知識だけだ。コネも技術もない。俺の妄想を実現させるのは難しいさ。それに、何度も言うが俺は普通の人間だ」
「裏を返せば、それらが出来る人間がいれば実現出来るという事だろう？　なら話は早い。私の知り合いに一人それを出来るだけの技術を持った鍛冶がいる。目的地は決まったねえ。彼のいるドミーナまで行こうかあ」
　そう言ってラナは手綱を握り直した。手綱を握る手はやはり小さい。どうみても少女のそれだ。にも関わらずここまでしっかりとしている事に公平は少なからず驚いていた。自分が彼女と同じくらいの年頃は、鼻水を垂らしながらゲームをしていたような気がする。元々、女は男よりも精神的な成長が早いとはいうが、ラナ程の成長速度は珍しいだろう。
　そんな事を考えながらぼんやりと見ていた公平の視線に気付いたラナは、そのくりくりとした瞳を楽しそうに細めながらこう言った。
「君には少女性愛の趣味でもあるのかなあ？」
「俺が好きなのはグラマーなお姉さんだ。お前みたいなちんちくりんは守備範囲外だ」
「なら、私は君の守備範囲内という訳だあ。私は君よりも年上だろう

し、それなりに胸も大きいと自負しているしねえ。背が低いのは我慢してもらうしかないけどねえ」
「いやいやいや。どう考えてもそれはない。ラナが年上はないだろう」
「私は２５才だよお？　君は見たところ１８とか２０だろう？」
「なんてこった……マジかよ……」
　仮にラナの年齢を１０代前半として考えてもその童顔と身長の低さでは、年齢相応には見られないだろう。ましてその容姿で２５など言われても到底信じられないが、公平は先程までの会話でラナの聡明さを知っているので、なまじ否定出来なかった。
「どうしてか背が伸びなくてねえ。牛乳も飲んでるんだけどさっぱりだあ」
「左様で御座いますか。もういい。不毛すぎるこの会話は終わりにしよう。ドミーナだかって国にはどれくらいで着くんだ？」
　スフィーダを発ってから既に４時間が経過していた。季節が春である事を考慮しても、そろそろ日が落ちる頃合いだ。今はまだなんとか夕日で道が見えるが、もうじき見えなくなるのは明白だった。
「後３時間くらいかなあ。ご飯も食べなきゃいけないし、今日はここまでにして晩御飯の準備をしようかあ」
　そうして始まった夕食作りだったが、二人共料理などというものには縁のない生活をしてきたために、出来上がったものは料理としての体をなしていなかった。
　大抵のものは鍋にしてしまえば食べられるという二人の持論の元、ラナの所持していた得体の知れない食料をちゃんぽんにして煮たのだが、どういう訳だか出来上がった鍋は緑色をしていた。更に、匂いは甘いというおまけ付きである。
「どうすんだよこれ。お前が食えるっていうから一つ目の魚入れたらこのザマだよ」
「責任転嫁はよくないよお。君だってノリノリで紫トマトを入れていたじゃないかあ」
「……しょうがない。俺も男の子だ。先陣を切ってやる」

公平はスフィーダから拝借してきた銀のスプーンで鍋の中身をすくった。にちゃ、というおよそ鍋からは発せれないだろう音と共に何かの肉片がスプーンには乗っていた。公平は震える手でそれを口へと運んだ。
「な、なんだこれは。甘い。あの材料からどうすればこんな味になるんだ」
「どれどれ。……ん、本当だ。私達が入れた食材の中には甘いものはなかったはずなんだけどなあ。化学反応でも起こしたのかなあ？私は意外とこの味好きかもしれない」
「まあ、食えなくはないな。飯というよりもデザート食ってる気分だけど」
　そうして二人は、にちゃにちゃというなんとも微妙な音を立てながら夕食を終えた。そして、ここで一つの問題が発生した。野宿をする以上、馬車の中で寝る訳なのだが、布団が一つしかない上に、離れて眠れる程のスペースがなかった。
「しょうがない。俺は馬車の外で寝よう」
「一緒に寝ればいいじゃないか。まだ初春だから夜は冷えるよお。外で寝たりしたら凍っちゃうぞお」
「いや、でもさ。一応俺男だしさ」
「君は私を襲う気なのかい？」
「それはないと言い切れる」
「ひどいなあ。女としての自信を失うよ。でも、それなら問題はないじゃないか。私も一人では寝たくないんだあ。荷物がかさばるから薄手の毛布しか持ってきてないからねえ」
　事も無げに言うラナの姿にある種の諦観を感じた公平は、結局馬車の中で眠る事を選択した。

Ｇｏｏｄ　ｂｙｅ３

「結局全然寝れんかった……。まさかラナを意識するとは」
　翌朝、肌ツヤの良いラナとは対照に公平の目の下にはクマが出来ていた。ラナが自身の守備範囲外であると高をくくった結果である。
　問題ないと思っていた。しかし、いざ同じ毛布に包まるとミルクのような甘い香りがラナから漂ってきたのだ。一度意識してしまうと泥沼だった。公平は、すぐ隣に女が寝ているという異常な事態に緊張してしまい、一向に眠りにつくことが出来なかった。気がつけば、朝日はとっくに昇っていた。
「いやあ、隣に人がいるとあったかいねえ。お陰でよく眠れたよお」
「よかったですね……。さっさと飯食べてドミーナ行こうぜ。これ以上野宿はしたくない。睡眠不足で死んでしまう」
「そうしようかあ。じゃあまずは朝ごはんを作ろうかあ。昨日みたいな失敗はしないように怪しい食材を入れるのはやめようねえ」
「それがいい。普通に野菜スープを作ろう。普通にな。普通だぞ？」
　普通の料理を作る。それを念頭に置いて料理作りを始めた二人だったが、やはり出来上がった料理は普通ではなかった。紫色をしていたのだ。
「何これすごい。食欲がどんどん失くなっていく」
「どうしてこんなになるんだろうねえ。今回はおかしな食材は入れなかったはずなんだけどなあ。調味料が悪いのかな？」
　ラナの言う通り、今回二人はおかしな食材は入れていない。この世界で一般的に食べれらている野菜と、カサミ鳥という人間に養殖される程に弱い魔物からとった鶏ガラスープを入れただけだ。
「昨日食べたのも見た目に反して美味しかったからねえ。どれどれ、私が先陣を切るよ。……うえぇ。なんだこれはあ、とっても美味しくないよ」
　ラナはスープを口に含んですぐに鍋に吐き戻した。吐き出しきれずにダラダラと垂れたスープが彼女の服にシミをつくっていく。
「うわ！　ばっちいな。吐くならその辺にしろよ。なんでよりにも

よって鍋に吐き出すんだよ」
「ごめんよお。あまりにも美味しくなかったものだから、つい。君も食べてみるといい」
　口ではそう言ったが、悪びれる様子のないラナは自身のスプーンでスープをすくって公平の口元まで持っていった。ラナの行動に色々と思うところがあったが、公平は結局、差し出されたスープに口をつけた。
「なんだよ、まずいっていうからどんなもんかと思ったら普通にうまいじゃん」
　スープは見た目に反してありふれた野菜スープだった。鶏ガラベースのコンソメスープといったところだろうか。大きめの野菜がたくさん入っているので、体にもよさそうだ。
「えええ。それはないよお。どう考えても昨日の方が美味しかったよお。だってこれ鳥くさいよお。それに、しょっぱいじゃないかあ」
「そりゃ鶏ガラ入れましたしおすし。というよりも野菜スープが甘かったらそれはそれで嫌だな。俺牛乳スープとか嫌いなんだよ」
「絶対に甘い方がいいよお。これ美味しくないなあ」
「いいから食べなさい。食べ物を粗末にしてはいけません」
　公平に言われ、ラナはいやいやながらもスープを飲み始めた。

○

　食事を終えた二人は、再びドミーナを目指し歩みを進めていた。道中ラナが無理して料理を食べたために、リバースするというイベントを起こしながらも順調にドミーナへと近づいていた。しかし、二時間程経った頃だろうか。もうすぐでドミーナに着くというところで二人の前に一台の馬車が立ちはだかった。
「ラナ。俺予想するわ。あの馬車絶対盗賊団かなんかのだ」
「奇遇だねえ。私もそう思っていたところだあ」
「俺ちょっと武器取ってくるわ」
　そう言って公平は天幕に覆われている荷台にクロスボウと剣に取りに戻った。
「バンズ盗賊団だ！　死にたくなかったら金目のものと馬を置いて逃

げな！」
　二人の悪い予想は的中した。目の前の馬車から3人の男が出てきた。
　男達の身なりはおよそいい身分のものではなかった。薄汚れたジャケットにボロボロのズボン。腰にさした短刀がこちらを威圧しているような気がした。
「とは言うものの、実際に渡したら殺すつもりだろう？　弱ったなあ。どうしたら見逃してくれる？」
「嬢ちゃん。奴隷になるのと変態に売り飛ばされるの、どっちがいい？　選ばせてやるよ」
「どっちもお断りだあ」
「そうかい。でもな、断るという選択肢はないんだよ！」
　盗賊団の一人がラナの手を引っ張り馬車から引きずり下ろし、その身を押さえつけた。そして、首元に短刀を突きつけ動きを封じた。
「もう一人いたな。出てこい！　嬢ちゃんがどうなってもいいのか！」
　男が叫んだ瞬間、横に控えていた盗賊団の男の頭にクロスボウの矢が突き刺さった。公平が荷台から放ったものだった。
　装填済みのクロスボウを左手に、剣を右手に持った公平が天幕をどけながら荷台から出てきた。
「そいつは困るな。一応俺の連れなんだ。勝手にどうこうされるのは気分が悪い」
「てめえ……よくも仲間を。許さね―」
　公平はセリフを言い終わるよりも先に、喋っている男にクロスボウを撃った。放たれた矢は、男の右目に吸い込まれた。一撃だ。
「うわ、エグいな」
「ふざけやがって！」
　盗賊団の男はラナを放り投げて短刀片手に公平に突っ込んだ。かたや公平は、男がその行動をとるとわかっていたかのように、撃ち切ったクロスボウを男に投げつけた。そして、たたらを踏んだところを剣で斬りかかった。

剣は男の右肩口から鎖骨を過ぎた辺りまで筋肉をグチャグチャにした。致命傷だ。ゆっくりとくずおれた。もはや男は虫の息だった。これ以上何かをしなくても息絶えるのは明白だったが、哀れに思った公平は心臓に剣を一突きし、男を苦しみから解放した。

「ふう。こいつら弱いな」

剣に付着した血を振り払い、汗を拭いながら公平が言った。

「いや、君が強いんだと思うよ。見てごらん、彼らは筋肉がとても発達している。大した切れ味もないだろうその剣でこれ程までに深い傷を負わせるのは生半可な力じゃ無理だ」

「んなこたーない。見掛け倒しだ。誰でも倒せる。俺にだって出来たんだから」

公平はそう言ったが、バンズ盗賊団は二人に会う前にも一台の馬車を襲い、屈強な農民の男二人を殺していた。

「君、やっぱり普通じゃないよ」

「何度も言うが俺は普通だ。今回はあれだ、たまたま運が良かったんだよ。いや、人殺してもなんとも思ってない辺り普通じゃなかったりして……」

事実、公平は初めて人を殺めたというのに極めて平静だった。いくらＦＰＳなどで人を殺す事に対する抵抗が薄れているといってもゲームと現実は違う。にも関わらずこれだけ平静でいられるのは異常であるといえる。

「強情だなあ。いくら君が普通だと言い張っても、周りはそうは思わないよお」

「さいですか。んな事より、大丈夫か？　むさいおっさんに押さえつけられてたけど」

「君のおかげでねえ。せっかくだから、彼らのお宝を頂いていこうか。路銀はたくさんあるに越した事はないしねえ」

「俺もわりとろくでなしだけど、ラナも負けず劣らずだな」

そうして二人は盗賊団のお宝を回収し、再びドミーナに向けて出発した。

ドミーナはもうすぐだ。後一時間程で到着する。その間、公平はガ

タガタと揺れる馬車の荷台で少しでも足りない睡眠を補おうとした。

Guild

ドミーナへと辿り着いた二人は別行動をとる事にした。ラナは件の鍛冶工房へと話をつけに、公平はラナの勧めで冒険者ギルドへと向かっていた。

冒険者ギルドは、その名の通り冒険者のためのギルドである。冒険者同士での情報交換、相互扶助を目的に設立された施設だ。ギルドを介した傭兵の斡旋、魔物討伐依頼など、およそ冒険者に必要な事は全てここで済ます事が出来る。

ギルドへの登録は非常に簡単で、必要書類を提出するだけで登録が完了するため、冒険者の多くはギルドにその名を登録していた。

また、ギルドは地域に密着した施設であり、定期的にギルド主催の祭りなどが行われている。それらはギルドフェスタと呼ばれており、街をあげたお祭りとなっている。そのため、どうしても血生臭い印象が付きがちな冒険者ギルドだが、印象に反してその存在に嫌悪感を抱いている人は少なかった。

そんな冒険者ギルドにハウトゥーファンタジーを地図代わりに辿り着いた公平だったが、いつまで経ってもギルドに登録する事が出来ずにいた。

公平はこの世界に来たばかりであり、必要書類に事項を記載しようにも何も書けなかったのだ。まさか、正式書類に住所不定などと書くわけにもいかない。更に言うと、公平はそもそもこの世界の文字を書くことが出来ない。どういう訳だか読むことは出来ても書くことが出来ないのだ。

「どうすれと……」

何も出来ないままに２０分が過ぎてしまった。いつまで経っても受付嬢に渡された書類は空白。座っている席には公平一人。まるで知らない土地に一人ポツンといるかのような状況だった。いや、実際にそうだった。

そうして更に５分程経った頃だろうか。公平の座る席に軽装の鎧を着た一人の男が現れ座った。年の頃は公平より５つ程上、二十五、

六才だろう。茶色の瞳と金髪が印象的だった。男はコップを二つ持っていた。その内の一つを公平に差し出し、こう言った。
「ギルドは初めてか？　俺はロベルト。ロベルト・アルフォンスだ。よろしく」
　ロベルトは爽やかな笑みを浮かべながら握手を求めた。公平もまた安心感からくる笑みを浮かべ、その手を握り返した。
「助かるよ。どうしていいかわからなくて困ってたんだ。俺は里中公平。よろしく」
「大丈夫、簡単さ。いいかい、ここに名前を記入するんだ。そして、ここに出身地を―」
「―すまん。俺字書けないんだ。代わりに書いてもらえないか？」
「そうだったのか。よし任せろ」
　そうして必要事項をロベルトに記載してもらった公平は、ロベルトと共に書類を受付嬢に提出しに行ったのだが、ここでまた一つ問題が発生した。登録料がかかるのだ。この世界に来たばかりの公平は当然金など持っていない。せいぜい持っているものといえばスフィーダから拝借してきた武器と金食器などだが、それも全てラナに預けてきてしまった。公平は今、完全に無一文だった。
　そんな公平を見かねたロベルトは、公平の代わりにギルド登録料である５０００アルを払った。酒場などで腹一杯食事した時にかかる費用が１０００アル程度である事を考えると、決して安くはなかったが、ロベルトは快く出してくれた。
「何から何まで悪いな。ありがとう。本当に助かったよ」
　ロベルトのおかげで、無事受付嬢から冒険者ギルド登録済みである事を証明する冒険者の紋章を受けとる事が出来た公平が言った。
「いいんだ。困った時はお互い様というじゃないか。君が俺と一緒に冒険出来る日を楽しみにしてるよ。じゃあな」
　さり気なく自身の金色の冒険者の紋章を見せ、飲み終わったコップを片手にロベルトはギルドを後にした。
「冒険者の紋章ねえ」
　公平の手にしている紋章は木製だった。ロベルトの持っていた金

の紋章に比べると、ずいぶんとみすぼらしいもののように感じられる。
　冒険者には等級があった。登録したての者は特別な理由などがない限り１０級から始まる。冒険者は、それぞれの等級に見合った依頼をこなし、受付嬢が頃合いを見計らって昇級依頼を受ける事で級が上がる。
　多くの冒険者は５級の壁を超えることが出来ずに、６級のままその冒険人生を終える事が多かった。そうした事を考えると、あの年にして３級冒険者である事を証明する金の紋章を持っているロベルトは非常に才覚に優れた冒険者であるといえるだろう。
　ロベルトにもらったジュースを飲みながら、渡された木製の紋章で手遊びをしていた公平の元に、顔にススをつけたラナが現れた。
「やあやあ。待たせたねえ。その様子だと、無事にギルドに登録する事が出来たみたいだねえ。よかったよかった」
「無事ではないけどな。ロベルトって人に金まで払ってもらったよ。今度会ったら返さないといかん」
「ロベルトってロベルト・アルフォンスの事かい？」
「そうそう。知り合いか？」
「知り合いも何も彼、結構有名だよお。若干２５才にして３級の紋章を持つ冒険者。今後の活躍を期待されてる冒険者の一人だねえ」
　ロベルトはドミーナ出身の冒険者であり、同時にドミーナ一の冒険者だった。そのため、ドミーナ王の覚えもよく、大々的に宣伝されていた。そのおかげか、依頼もドミーナに限らず他国からも舞い込むという有名ぶりだった。
「ほー。あいつそんなすごい人だったんだ。有名人にしてはずいぶんと親切だったな」
「それは君だからじゃないかなあ？　彼は才能の無い人物は突き放す事で有名だよお。彼は騎士だけど、多分、君の潜在魔力の大きさを無意識に感じ取ったんじゃないかな？」
「まーた潜在魔力か。さっぱりわからん。魔力っていわれても魔法なんてなんも使えんぞ？」

「魔力は何も魔法だけに限らないよ。魔力で動いているものは魔導機械っていうんだけどそれを動かすのにも魔力は必要なのさ。大掛かりなものになればなる程必要魔力も高くなっていく。過去にゴーレムを作ろうとしたらしいんだけど、結局動かすために必要な魔力を保有している人がいなくていつの間にか研究は終わってしまったんだあ。私はいつかゴーレムも完成させたいんだあ。もしかしたら君なら出来るかもよ?」
「うーむ。ラナだけならともかく、有名人にまでそういう目で見られている可能性があるっていう事はもしかして本当に俺って魔力持ちなのかな?」
「魔力を持っているのは間違いないよ。私が保証する。問題はその大きさだ。こればかりは魔法を専門にしている人じゃないと測りきれない」
「要する気にしてもしょうがないって事ね。オーケー、鍛冶屋に話しつけてきたんだろ? そこに行こう。いつまでもギルドにいてもしょうがない」
公平はコップの中身を一気に傾けた。二人はギルドを後にし、ラナの知り合いがいるという鍛冶工房へと向かった。